

幼児教育と詩歌

—倉橋惣三に学ぶ—

米村佳樹

(四国大学)

1. はじめに

わが国の幼稚園や保育所では、幼児の口頭詩の収集は各地で行われているが、詩歌の吟誦は教育実践として定着していない。保育所で詩を積極的に活用してきた今井和子は、保育者たちがもっと幼児たちとの実生活の中で詩を口ずさんでほしいと訴えている。

こうした我が国の状況の下、戦前において幼児教育における詩歌に関して積極的に発言し、自らも詩歌を創作すると共に、東京女子高等師範学校附属幼稚園における詩の教育実践を支えていた倉橋惣三に学ぶことは大きな意義を持つと思われる。本発表は、倉橋自身の詩歌との関わりと共に、幼稚園教育や保育者養成における詩歌に関する彼の見解を明らかにすることを目的としている。

2. 倉橋惣三と詩歌

倉橋惣三は幼児教育において詩歌を積極的に活用しようとしたが、彼自身も詩歌に強い興味を持っていた。平井信義によれば、倉橋は「心理学者と呼ばれるよりも、詩人と呼ばれたい」と語っていたという。実際、倉橋は名詩名句を愛誦すると共に、自らも詩歌を数多く創作している。彼が詩歌に強く興味を持った背景には、幼少期に詩歌を聞かせてくれた母親の影響や『コドモノクニ』の編集に参画して、北原白秋らの詩を愛誦した経験がある。

(1) 倉橋の愛誦した詩歌

倉橋は、英国詩人のブレイクやスチープンソン、ワーズワース、我が国の北原白秋、小林一茶などの詩歌を愛誦した。いずれも、子どもを詠じている詩人であり、倉橋は、彼らの詩歌を通じて、自分では発見できなかった、ありふれた子どもたちのなかにある偉大さを教えられたという。

雨 スチープンソン(葛原滋訳)

雨はどこにも降ってゐる
家にも木にも降ってゐる
ここの傘にも降ってゐる
海の船にも降ってゐる

倉橋は、雨の日に、静かに「はり絵」に熱中している女の子が、この詩を歌っているのを耳にした。「おや、可愛い指で紙をおしながら、小声で何か歌ってゐる。雨が降る降る。雨が降る。ここでは傘の上に降る。ス

チープンソンの詩だな」。

また、倉橋は小林一茶を我が国の児童詩人の第一人者と評価すると共に、吟誦する者の胸に響いて忘れられない名句を数多く紹介している。例えば、三人の子どもの父であり、子煩悩な一茶が歌った俳句として、

○ 這へ笑へ二つになるぞ今朝からは

○ 我が子供も鬼を追ひにけり

○ 妹が子は餅負ふほどになりけり

さらに、倉橋はユーモアやナンセンスに満ちたイギリスの「マザーグース」もお気に入りであり、保育絵本の『キンダーブック』の創刊 25 周年記念号として、「マザーグース」の特集号を編纂した。

(2) 倉橋によって創作された詩歌

倉橋は自ら創作した詩歌について、「一茶やスチープンソンでは、流石に子供が目の前に見えてくることもあるが、彼の俳句や短歌では、実は詩の形で子供を想っているに過ぎないことが、いつもながら我ながらもどかしい」と自嘲気味に評価しているが、ここに子どもを詠じた彼の詩歌を紹介する。

① 詩

<無題>

秋晴れるる日
子どもらの声高し
外へ、外へ、外へ

② 短歌—幼稚園の遠足日に

○ 事もなく帰り着きけり若き保母の
日やけの頬にほっとせる色
○ 子らと共に野みちをゆけば靴がなる
五月の空はにこやかに晴れて

③ 幼稚園唱歌の作詞

倉橋にとって、幼稚園で子どもたちと童謡を歌うことは、その子自身が歌いたがっている詩の世界を与えることであった。倉橋は、こうした思いから、「六月」「山のともだち」「うみ」「ねんどあそび」「ばったみつけた」「幼稚園の庭」「おうちの前」など、子どもの歌の作詞を数多く手がけた。とりわけ、社会生活における実際の勤労を扱った「いうびんやさん」「渡し場の船頭さん」「火消しのをじさん」や、幼児の心持ちを率直に表現した唱歌「ばったみつけた」などは注目される。

ばったみつけた

ばったみつけ たくさのなか

あ あ とんだ
 ばった とんでいっちゃった

自らも作詞を手がける一方で、倉橋は幼稚園の童謡唱歌について、日頃から幼児たちに接している幼稚園保母に作詞するように勧め、作品の応募も行った。

3. 幼稚園教育と詩歌

(1) 自然詩人としての幼い子ども

倉橋は、「月と子ども」と題する文章中で、次のように語っている。「子どもは自然詩人だといわれます。あの純な心は、こまやかに自然の美しさを感じ、親しみをもち、またしばしば、自然の不思議を思い神秘にさえも打たれています」。このように倉橋は、ワーズワースや北原白秋に学びながら、幼い子どもは生来の自然詩人と考えていた。

倉橋は、月などを観察して、幼児の詩心を満足させ、詩心を養うことも大切な教育の一つと考えたと共に、自然の美しさや不思議などを表現した幼い子どものつぶやきを収集して、詩集を作ることを勧めた。倉橋が編集顧問をしていた雑誌『幼児の教育』には、次のような幼児のつぶやきや、自由詩が掲載されている。

月の山(2歳—3歳)

お月さま
 どこから来たの、
 お家へかえるわ、
 どこへ行くの、
 お月さま
 小さくなっちゃった

また、倉橋と堀七蔵は、附属幼稚園の幼児たちが発した言葉に幼児たちが描いた絵をつけて、『コドモカルタ』(昭和4年、フレーベル館)を出版している。イモガコロガル、ロバ ガ ニゲル、ハチ ガ サス。

(2) 保育における詩歌の活用

倉橋は、「保育座談会—談話について」の中で詩歌の活用を勧めている。彼は、「その内容の問題になりますが、その中に何とかの方法で詩を取り入れたいものと思ひます」と語る。それに対して、附属幼稚園保母、新庄よしこは「普通、詩ですか」と問う。倉橋は、「むづかしいですが、和歌の中にも分かるものがあると思ふのです。…子供の春の日の気持は子供自身も唱ふが詩人はその気持を高めます」と答えている。さらに新庄は「私、いいと思ふ詩のようなものを一緒に云つたりして居ります。口にして調子のよいようなものです」と語っている。倉橋は、「完全な詩はむづかしいけれどもその一部分の句などをね」。

このように倉橋は詩歌を保育の中に取り入れること

を勧めているが、附属幼稚園では新庄が「談話」の一つとして詩の吟誦に積極的に取り組んだ。彼女は、第一に幼児の発したつぶやきを詩として、歌として詠んで聞かせた。第二に内容が幼児に分かりやすく、口調も良く、短い大人の詩を『コドモノクニ』や『合歓の揺籃』『世界童話体系』などから選択し、情景を心に浮かべながら詩を幼児に3、4回詠んだ。それから全体の情景が幼児の心像として浮かび上がったと思われる時点で、まずは幼児に自分の後から一緒に一句ずつ、最後に全部を吟唱させた。

4. 保育者と詩感の教養

倉橋は、自然詩人である幼児を相手にしている保育者の詩感(詩心)を養うために詩の吟誦を勧めている。詩の吟誦は、保育者にとって、①子どもの友になれる、②子どもの偉大さや美を発見し驚嘆する、③うるおいを与える、という意義を有するという。

第一に子どもと一つになれるには、子どもの心と相通じる所、つまり詩感が不可欠であると倉橋は考えた。詩感は幼児の心の特質の一つであり、「自然に対する感觸の繊細さである。心のはだのこまやかさである」。幼児は、草の葉や土の色、空の光、雲の動きに詩感をふと動かすという。

第二に保育者は、その詩感、詩心によって、幼児の美点を見出すことが出来る。倉橋にとって、詩心は、特に驚く心は、幼い子どもの中に偉大さや美を発見し、驚嘆する保育者の中心的な資質であった。

第三に詩を吟誦することは、保育者がうるおいを得る手段の一つであった。幼児は、絶えずうるおいを求めている。保育者は、うるおいの与え手でなければならないが、とにかく、その心は潤れやすいので、絶えずうるおいを汲み取る修養を必要とする。

倉橋は、詩感を養ってくれるものなら、短歌でも長詩でもいい、我が国の詩人でも外国の詩人でもいいから、自分の趣味に合った詩集をいつも傍らに置いて、吟誦反復するように勧めている。彼が編集顧問をしていた『幼児の教育』には、保育者の詩感を教養するためか、一茶や芭蕉、スチーブンスンなどの数多くの詩歌が掲載されていた。

5. おわりに

以上、幼児教育と詩歌に関する倉橋の見解を明らかにしてきたが、こうした分野においても多くの種を蒔いた倉橋の尽力は高く評価される。今後、彼の見解や新庄の実践のみならず、欧米における詩の教育に関する理論や実践に学びながら、幼児教育や保育者養成における詩の教育のあり方についてさらに究明したい。